

## 海老沢達郎の教養講座

### 第4回 映画で楽しむ異文化理解 ― 映画『追憶』と「赤狩り」 (2021年7月15日)

今回は、話題を変えて映画についてお話したいと思います。ここで言う映画は洋画です。最初に、「私の映画との出会い」についてお話いたします。私が初めて洋画を見たのは昭和30年（1955年）頃の小学校高学年の時でした。それは、父と一緒に見に行ったアメリカ映画でした。当時は西部劇が流行っていて、ジョン・ウェイン（John Wayne）やゲーリー・クーパー（Gary Cooper）が西部劇のスターでした。若い人には、ジョン・ウェインやゲーリー・クーパーと言っても分からないと思いますが、大スターでした。確か三本立ての「西部劇」2本とデズニーの「アニメ映画」だったと記憶しています。特に、デズニーの「アニメ映画」は今でも部分的にはありますが、その内容をはっきりと覚えております。これが、私にとっては洋画との最初の出会いでした。因みに、洋楽については、中学1年時の12月に、英語の先生が授業中に、ビング・クロスビー（Bing Crosby）が歌って有名になった「ホワイト・クリスマス」（*White Christmas*）を英語で歌ってくれたのが最初の洋楽との出会いでした。今でも覚えているわけですので、感動したものだと思います。アメリカの歌手の歌を直接聞いたのは、「ダイアナ」（*Diana*）で1957年にデビューし、いきなり大ヒットを飛ばしたポール・アンカ（Paul Anka）でした。1958年には、「君はわが運命」（*You Are My Destiny*）も大ヒットしました。確か中学2～3年頃と記憶しております。日本でも大人気となり、中学3年の遠足で、帰りのバスの中でみんなと一緒にポール・アンカの歌を歌った思い出もあります。こうして、私は洋画や洋楽に興味を抱き始めました。



尚、映画“*Holiday Inn*”（1942年）の中でも、主演のビング・クロスビーが「ホワイト・クリスマス」を歌い、これは有名なシーンとなっています。日本ではこの映画の邦題は「スイング・ホテル」（日本公開は1947年）となっています。当時の日本では、“Inn”という英語が日本国民には馴染みがなかったの

で、全く映画の内容とは関係のない邦題にしたものと推測しております。映画 "Holiday Inn" は主人公（ビング・クロスビー）が休日だけにオープンするというホテルを開業する物語です。それで "Holiday Inn" という題名になったわけです。アメリカのホテル・チェーンの Holiday Inn は、この映画の名前から取ったと言われております。

昭和 30 年代の中頃（1960 年）に、テレビが日本の家庭に普及し、アメリカのテレビ映画が日本のテレビで放送され始めました。私はアメリカのテレビ映画に夢中になりました。キャデラックのような大型の自動車に乗り、キッチンには大型の冷蔵庫があり、食卓は御馳走で溢れたアメリカ人の生活を見て、カルチャー・ショックを受けると同時に、憧れを感じました。当時の日本人の生活とはかけ離れたものだったからでしょう。この頃、コカ・コーラが日本に入ってきました。同じ年のいところが私の家にコカ・コーラを持ってきて、初めてコカ・コーラを飲んだ日のことを今でもはっきりと覚えております。その、飲物としては不思議な色と味に異文化の香りを感じました。こうして、私は外国の文化に興味を持ち、洋画も見erようになっていきました。私見ですが、場合によっては、映画は一人の人間の人生を変えてしまう程の大きな影響力を持っているのではないかと考えています。私が職業として英語関連の道に進んだのも、そうかもしれません。

さて、本題に入ります。「赤狩り」を背景にした 1973 年のラブ・ストーリー『追憶』（*The Way We Were*）を取り上げます。監督はシドニー・ポラック（Sydney Pollack）、主演はバーブラ・ストライサンド（Barbra Streisand）とロバート・レッドフォード（Robert Redford）。脚本は原作と同じアーサー・ローレンツ（Arthur Laurents）で、コーネル大学での彼の大学時代の体験に基づいて書かれたものです。第 46 回（1974 年）アカデミー賞で歌曲賞・作曲賞を受賞。映画『追憶』は、AFI（American Film Institute）が選んだ情熱的ラブ・ストーリーのベスト 100 の 6 位にランクされている恋愛映画の名作です。

### AFI's 100 years.....100 Passions

#### —The 100 Greatest Love Stories Of All Time—

順位	映画名	公開
1 位	カサブランカ ( <i>Casablanca</i> )	1942 年
2 位	風と共に去りぬ ( <i>Gone with the Wind</i> )	1939 年
3 位	ウエスト・サイド・ストーリー ( <i>West Side Story</i> )	1961 年
4 位	ローマの休日 ( <i>Roman Holiday</i> )	1953 年

5位	めぐり逢い ( <i>An Affair to Remember</i> )	1957年
6位	追憶 ( <i>The Way We Were</i> )	1973年

AFI's 100 years....100 Passions を参考にして作成

また、バーブラ・ストライサンドが歌った主題歌の『追憶』は大ヒットし、AFIのアメリカ映画主題歌ベスト100の8位にランクされている名曲でもあります。映画「*Holiday Inn*」でビング・クロスビーが歌った「ホワイト・クリスマス」は第5位にランクされております。

では、映画『追憶』の粗筋を簡単に説明致します。時代は第2次世界大戦直前の1937年、アメリカ東部の大学。主人公のケイティ・モロスキー（バーブラ・ストライサンド）はユダヤ系で、反戦思想を強く持った、政治活動に熱中している女子学生。一方同じ大学に通うハベル・ガードナー（ロバート・レッドフォード）は政治には興味のないノンポリ学生ですが、スポーツ万能、人気者で、学生生活を楽しみながら、将来小説家を目指しています。このように、何もかもが違う二人が大学で出会います。そして、卒業後はそれぞれの道を歩むこととなります。

数年後の第2次世界大戦中、ニューヨークのラジオ放送局で働いていたケイティは同僚とナイトクラブに行き、そこで海軍士官の軍服を着たハベルと偶然出会い、交際が始まることとなります。しかし、ケイティの「話題と言えば政治のこと」で、ハベルの友達とも仲良くなれず、ハベルとも、自分の主張を通そうとするためにムキになりすぎ、二人の関係はぎくしゃくし、何度も二人は危機に直面しますが、戦争終了後、これらの問題を乗り越えて、二人は結婚。やがて、ハベルの才能がハリウッドに認められ、二人はカリフォルニアに移住します。ハベルはハリウッドで脚本家として徐々に成功をおさめ、二人は幸せな生活を送り、ケイティは子供を身ごもります。これからという時に、「マッカーシズム」、いわゆる「赤狩り」という反共主義の嵐が全米中に吹き始めました。ハリウッドも例外ではありませんでした。ケイティは根っからの「政治好き」の性格から、自分の信念を曲げず、妊娠中にもかかわらず、反対運動に没頭するようになっていきます。一方、ハベルは、反対運動を続けるケイティには、これ以上ついていけないと考え、二人は対立。ハベルは、ケイティが女の子を出産したのを見届け、彼女の元を去ります。

そして、離婚から数年後、ニューヨークのプラザ・ホテル前で原爆禁止の署名活動をしていたケイティは、再婚者を連れてニューヨークにテレビの脚本の仕

事で来たハベルと偶然出会います。ケイティも再婚し、娘のレイチェルが元気に美しく成長したことを告げ、二人は抱擁して別れます。ハベルは妻のところに戻り、ケイティはまた原発禁止の書名活動を始め、二人はそれぞれの道を歩み、映画は終わります。この間、主題歌の「追憶」が流れます。やはり、映画に音楽は欠かせないですね。

「赤狩り」とは、第二次大戦後の米ソ冷戦を背景に、1940年代後半から1950年代後半にかけて、共産主義に対する恐怖から、アメリカ国内の共産主義者やシンパなどを様々な公職から追放することでした。その中には、映画監督、脚本家、俳優などのハリウッド関係者も含まれていました。赤狩りの中心人物であった共和党の上院議員のジョセフ・マッカーシー（Joseph McCarthy）の名前からマッカーシズムと言われています。約10,000人が「赤狩り」のために公職から追放されたと言われています。あの有名なチャールズ・チャップリン（Sir Charles Spencer Chaplin）にも嫌疑がかかり、1952年仕事でイギリスに向かうため出国した途端、アメリカへの再入国許可を取り消され、その後はアメリカに戻らず、亡くなるまでスイスで過ごしました。

「赤狩り」の標的となった映画関係者の中には、対照的な二人の人物がおります。一人は、後に映画監督の巨匠と呼ばれるようになったエリア・カザン（Elia Kazan）です。共産主義者の疑いがあるものを、“Un-American”（非アメリカ的）として糾弾していた「下院非米活動委員会」（The House Un-American Activities Committee）の公聴会に、召喚されました。彼は1930年代の初めの一時期共産党員でありましたが、劇団仲間の名前を告発して、映画界への復帰を許されました。このため、彼は「裏切り者、密告者」という汚名を着せられましたが、ハリウッドに残り、映画監督として、1947年の「紳士協定」（Gentleman's Agreement）、1951年の「欲望という名の電車」（A Streetcar Named Desire）、1954年の「波止場」（On the Waterfront）、1955年の「エデンの東」（East of Eden）、1961年の「草原の輝き」（Splendor in the Grass）などの代表作を残しました。「紳士協定」（グレゴリー・ペック主演）と「波止場」（マーロン・ブランド主演）ではアカデミー賞監督賞を受賞しました。「紳士協定」では、「監督賞」のほか、作品賞、助演女優賞の3部門でアカデミー賞受賞。「欲望という名の電車」では、ヴィヴィアン・リー（Vivien Leigh）が主演女優賞を、そのほか助演男優賞、助演女優賞、美術賞を受賞。「波止場」では、監督賞のほかに、作品賞、マーロン・ブランド（Marlon Brando）が主演男優賞、8部門でアカデミー賞を受賞しました。「エデンの東」は、ジェームス・ディーン（James Dean）が一躍大スターの地位を築いた映画となりました。第71回アカデミー

賞（1999年3月）で、長年に亘って映画界に尽くした功績により、「アカデミー名誉賞」（Academy Honorary Award）を受賞（一部の映画人から受賞に対し抗議がありました）し、映画界に大きな足跡を残しました。

もう一人の人物は、作家・脚本家・映画監督のダルトン・トランボ（Dalton Trumbo）です。彼も一時期共産党員でした。下院非米活動委員会に召喚され、尋問されましたが、証言を拒否しました。その結果、議会侮辱罪を言い渡され、禁固1年の実刑となり、映画界から追放されました。しかし、出所後、「偽名や名義貸し」を利用して、彼は映画の脚本を書き続けました。一つの作品を紹介します。それは、1953年公開の「ローマの休日」（*Roman Holiday*）です。監督がウィリアム・ワイラー（William Wyler）、主演がオードリー・ヘプバーン（Audrey Hepburn）とグレゴリー・ペック（Gregory Peck）。トランボが原案と脚本を書いたのですが、監督のウィリアム・ワイラーは、それを秘密にして、映画を製作しましたが、何とアカデミー賞原案賞（1956年を最後に原案賞は廃止されました）を受賞してしまいました（脚本賞はノミネート）。名義を貸した脚本家のイアン・マクレラン・ハンター（Ian McLellan Hunter）が受賞者となり、当然、ダルトン・トランボの名前は原案者にはありませんでした。彼の死後（1976年死亡）、1993年にアカデミー賞原案賞が送られました。私の手元にあるDVD「ローマの休日」（Special Collection's Edition）には、“Story by Dalton Trumbo”（ダルトン・トランボ原案）と書かれておりますが、“Screenplay by Ian McLellan Hunter and John Dighton”（イアン・マクレラン・ハンター&ジョン・ダイトン脚本）とあり、まだダルトン・トランボの名前は脚本欄にはありません。ハンターとダイトンがトランボの脚本に手を加えたのです。そしてついに、2011年12月、米脚本家組合（WGA）が「ローマの休日」の原案者をダルトン・トランボに正式に変更し、脚本にダルトン・トランボの名前を追加いたしました。死後35年後に、彼は名誉を回復したのです。その他の作品としては、1956年の「黒い牡牛」（*The Brave One*）で、ロバート・リッチ（Robert Rich）の偽名でアカデミー賞原案賞を受賞（当然、授賞式には出席していません）、1975年（亡くなる1年前）に正式に原案賞が送られました。その後、実名で、1960年の「スパルタカス」（*Spartacus*）、1960年の「栄光の脱出」（*Exodus*）、1973年の「パピヨン」（*Papillon*）などの脚本を書き、彼の反戦小説「ジョニーは戦場に行った」（*Johnny Got His Gun*）を映画化（1971年）し、その監督を務め、1976年に亡くなりました。ダルトン・トランボは信念と執念を持ち続けた人物ではないでしょうか（Wowow「赤狩りとアカデミー賞」を一部参考）。

映画『追憶』は、このように全米を揺るがした「赤狩り」を背景にしたラブ・

ストーリーです。「赤狩り」が、ケイティとハベルの二人の人生を左右する出来事となり、二人は愛しあっているのに別れなければならなくなりました。従って、「赤狩り」がアメリカ社会にどのような影響を与えたか（約 10,000 人が公職から追放されていったことなど）を理解していないと、この映画を十分に理解することはできません。映画は、娯楽なので楽しめばそれでいいという意見もあると思います。私も、そう思います。私も、そういう鑑賞法をすることもあります。ただ、『追憶』のように、「赤狩り」が映画の中で重要な役割を持っている以上、映画の背景を知ることが重要かと思います。これも、一つの映画鑑賞法だと思います。映画の背景を理解することで、映画が一層楽しくなるでしょう。これに、いい映画音楽が加わると更に楽しくなると思います。「たかが映画、されど映画」が、私の持論です。